

【研究ノート】

英語の完了形と日本語の対応表現
—「テイル」と「タ」の用法を中心に—

下内 充
東海女子短期大学

Abstract:

Most Japanese teachers of English must have noticed that the Japanese forms *-teiru*, *-teita*, and *-ta* are used when they translate English sentences with perfect forms into Japanese. The Japanese *-teiru* form and auxiliary *-ta* share the same kind of temporal structure with the English perfect: *-ta* can have a perfective meaning and *-teiru* has a function to 'refer to a past situation which has present relevance,' which is the definition of the English perfect (Comrie 1976: 12).

The present paper proposes to use the Japanese *-teiru* and *-ta* as temporal clues to comprehend the meanings of the English perfect tense. What the teachers may find important is the Japanese *-ta* must be used in a situation where a continuative event which the verb with it denotes can be interpreted as a completion of the event, and that *-teiru* and *-ta* can be used to refer to an event in the past and in the recent past (which is close to the present time) respectively, and *-ta* which refers to an event in the past can be a past auxiliary while *-teiru* referring to an event which is going on in the present time is a progressive marker.

キーワード：英語の完了、完結相、「テイル」、「タ」

Keywords: English perfect, perfective aspect, *-teiru*, *-ta*

1. はじめに

日本語の完了を表現するテイル、テイタ、タなどの形式が英語の完了形に対応することは英語を日本語を通して教えている人にはかなり意識されていると考えられる¹⁾

が、これらの形式を英語の完了形に関連づけて教室で意識的に指導していることを窺わせる報告は見あたらない。本論では、これらの形式を機械的に英語の完了形に結びつけることで、日本語の完了的表現についても考える機会を与え、現在完了形（及び過去完了形）などの指導に資する可能性があることを指摘したい。²⁾

基本的には英語の完了形のもつ主な用法を理解すれば日本語の訳語は自ずと決まり、それほど困難はないように思われるが、抽象的に英語のその諸用法について時間構造を説明されても、学習者の中には、日本語の側に具体的な手がかりがなくてはその用法に確信がもてないというものもあるに違いない。これは、英語の単語の「意味」についての十分な説明を受けて分かった後にもその意味の近似値として訳語が必要である場合に似ている。

すなわち、完了形と言われる形式（have + 過去分詞）に対して日本語の意識も並行するような（少数の）訳語を当てはめて意味をとる。例えば **make someone do something** という構造に「人に何かをさせる」という枠を当てはめ、直訳を得て後にその文脈に相応しい自然な訳文を作るという手順と並行するものである。

特に完了形の表現する行為が完結するかしないかという視点の表出が英語と日本語では異なっているため、この違いを英語の完了形の解説に明記する必要もあると考えられるので、この点についても考えてみたい。

2. 完了形の訳語

英語の現在完了形の用法として、学習参考書に挙げられている例を見てみよう³⁾。

- (A) 完了 I've just finished lunch.
いま昼飯を食べ終わった。
- (B) 経験 I have once lived in London.
私はかつてロンドンに住んでいたことがある。
- (C) 結果 Your letter of April 26 has arrived at my office.
貴兄の4月26日付の書簡が当研究室に届いております。
- (D) 状態の継続 I've known her since she was just a kid.
彼女がほんの子供の時から彼女を知っている。
- (E) 動作の継続 He has been playing the piano for three hours.
彼は3時間ずっとピアノを弾いていた。

英語の完了形は「以前の出来事もしくは状態が、話している瞬間と密接なかかわりを持っていることを示す」⁴⁾ 文法形式と考えられるので、日本語で意味を伝える場合にも、過去の時点と現在の時点との関わりを表現できる形式がその意味を伝えるのに利用される。

この点では上記の訳文はすべて意味を伝えるに十分な形式を用いている。それぞれの日本語の形式を列記するなら次のように書ける。ただし、最初の「完了」の例には、現在に近接した用法であることを示すため、「ところである」を加えた。

- (A) 食べ終わったところである。
- (B) 住んでいたことがある。
- (C) 届いている。
- (D) 弾いていた。

これらの形式に用いられている表現は、タとテイル、及びそれらを基にした合成形である。

- (A) タ + トコロデアル
- (B) テイル + タ + コトガアル
- (C) テイル
- (D) テイル + タ

次に完了形のそれぞれの用法にそってこれらの表現について考察したい。

3. 完了形の用法

英語の完了用法というのは実は日本語の完了の助動詞タに引かれた説明の仕方であり、欧米の英文法書が「継続」から「結果」へと説明するのとは逆方向でなされるのもこの助動詞の意味に便乗していると考えられ。⁵⁾ 「タ (トコロダ)」という形式を用いて、直前の完了を表現するのは、一応、現在時とのつながりを「トコロ」で示している点で、理にかなっている。タで表された行為は一瞬でも現在時点より以前であることが表現されるわけである。このような現在時に近い完了を表す場合にテイルを用いると、進行形の対応表現のように解釈されるので次のように非文になる。

- (1) * (彼は) いま昼飯を食べ終わっている。

日本語の口語の助動詞タは、「テアリ」の短縮形「タリ」から来ている。この文語の「タリ」の終止形が連体形に同化され「タル」となり、語尾の「ル」がおちて形成されたものである。⁶⁾ テイルのテはテアリのテと同じ完了の助動詞ツの連用形であるから、テイル、タは時間構造上、完了的な過去分詞をを伴っている英語の完了形と並行していると言える。ただ、タはそれを伴う動詞の表す行為が発話時点から（また過去のある時点が基準時点として選ばれた場合にはそこから）離れるにしたがって完了性は薄れ、過去の標識と知覚される点でテイルとは大きな違いがある。すなわち、タは発話時（または過去のある基準時）に近い場合は完了性が意識され、そこから離れた時点の行為を言及する際は過去と認識される傾向がある。一方、テイルは、それが表現する行為が現在時に近い（または重なると認知される）場合には進行相に読まれ、そこから離れると、2.の結果用法の訳文、次の（2）に見られるように、完了性を帯びるわけである。

- (2) 貴兄の4月26日付の書簡が当研究室に届いております。

したがって、日本語の助動詞タとの並行性を考慮して、発話時点に近い完了を表す用法としての完了用法であれば、「完了」のタを用いて訳出する、とすれば、学習者には学びやすいのではないかと考えられる。

次に経験用法であるが、2.で挙げた、(3)の文の時間構造は少々複雑である。「住む」という動詞は継続動詞⁷⁾であり、「住んでいる」という形が英語の live に対応することは(4)の継続用法においても確認できる。⁸⁾

- (3) a. I have once lived in London.
b. 私はかつてロンドンに住んでいたことがある。
- (4) a. We've lived in London since last September.
b. 私たちは去年の9月からロンドンに住んでいる。

(3)は「住んでいる」という継続的行為が過去に行われたことを「経験」として述べる表現であり、動作性の強い動詞による経験用法とは時間構造が異なっている。こ

の継続する行為が完了（完結）して現在時を離れるときには後に見るようにテイタが自然な対応表現となる。そのため、(3) の訳文としては「私はかつてロンドンに住んでいる」より「私はかつてロンドンに住んでいた」の方がより自然である。それに「経験」の認知を含めた表現が (3 b) である。

動作性の強い動詞による次の文ではテイルでの訳出に無理はない。また同時にタコトガアルでの訳出もできる。

(5) a. We have met somewhere before.

b. 私たちは以前会っている。

c. 私たちは以前会ったことがある。

(5 c) ような文の場合、タで示されているのは過去の行為であり、それとコトガアルによって現在時とつながれている。タコトガアルという形式が経験用法として定着しているのはこのように、過去の出来事または状態が、話している瞬間と密接な関わりをもっていることを示すことができるからである。日本語のこの表現は英語の完了形同様、人以外でも主語にとることができる。そして、経験用法はその名称としては適当ではないとしても、テイルまたはタコトガアルで訳出できる場合が多い⁹⁾。

結果用法の対応表現「テイル」はそのまま「ーテ（完了）＋イル（現在）」の構造であり、英語の完了形との並行性は高い。しばしば完了と結果の用法を区別しがたい例があり、その場合、例えば上記のように完了用法を助動詞タで訳出できる用法と見なすならば、次のように用法を区別できる場合がある¹⁰⁾。

(6) a. He has gone to Kyoto.

b. 彼は京都へ行った（ところだ）。[完了]

c. 彼は京都へ行ってしまった。[完了・結果]

d. 彼は京都へ行っている。[結果]

(6 c) に見られるテシマッタはここでは「完了」と「結果」の中間に読める場合である。

以上の3つの用法については、それぞれの行為は発話時点で終結しているが、2.の(D)、(E) で見た継続用法では、行為の完結・未完結の表示が日本語の側で必要で

ある。次の(7)、(8)について考えてみよう。

- (7) a. I've known her since she was just a kid.
 b. 彼女がほんの子供の時から彼女を知っている。
- (8) a. He has been playing the piano for three hours.
 b. 彼は3時間ずっとピアノを弾いていた。

(8)の訳文では「ピアノを弾く」行為は終了している、という解釈であるが、英語の文では「3時間ずっとピアノを弾いている」という意味も表せる。(A)(B)(C)においては言及されている行為は終結しているが、(D)(E)においてはむしろ終結しない場合が普通である¹¹⁾。(D)の動詞が認知動詞であるため終結し得ないという事情もあるが、このような言語内的文脈も含めて、継続用法における完結性は文脈に依存している。この完結相¹²⁾の完結をプラス(+)、未完結をマイナス(-)で表示するなら、次のような対応表が得られる。

完了形の用法	日本語
完了<+>	-タ
結果<+>	-テイル
経験<+>	-テイル
継続<->/<+>	-テイル/テイタ

英語の完了表現の時間構造は、完了進行形、完了受動形を含めて、日本語の助動詞タ及びテイルでとらえることができることになる。次に継続用法の完結、未完結について詳しく見てみたい。

4. 「テイル」と「テイタ」

現在完了進行形については、3.で見た完結相か未完結相かを文脈上読みとらないでは「テイル」とすべきか「テイタ」と訳すべきか、判断ができない。この点は学習参考書であっても明記すべきである。例えばある参考書は完了進行形の説明に「今後も続くことを暗示する場合もあり、直前に終了したことを表す場合もある」として、次の例文を挙げている¹³⁾。

(9) a. A Mr. Ito has been waiting to see you since two o'clock.

b. 伊藤さんとおっしゃる方が2時からお待ちです。

この文例の「伊藤さん」はこの発話時点でまだ待っているわけであるから、「待っています」(待つテイル)が適切であるが、当の本人を前にして次のように言う場合は、すでに待つ行為は完結したわけであるから、テイタでの訳出が普通である。

(10) c. Mr. Ito has been waiting to see you since two o'clock.

d. 伊藤さんは2時からお待ちでした。

また、[直前の終了]の例として挙げられた例文(11)には、「一般に主語がだれか特定できないときにはこの意味になる」と注記がある。

(11) a. Somebody has been sleeping in this bed.

b. だれかがこのベッドで寝ていた。

しかし、「このベッド」の前にいてこの文を言うのであるから、「寝ている」行為は終結しているはずであるので、訳文のように、完結相としてテイタが適切である。

和訳をする際に非常に役に立つ注記をもつ別の参考書の例では、この形式の訳語として「～し(続け)ている」「～し(続け)ていた」を採用している。この訳語を手がかりに、以下の訳文を得るのは難しくないと思われる。¹⁴⁾

① I have been reading to him since ten o'clock.

10時から彼に読んでやっている。

② He has been painting the door.

彼はドアを塗っていたんです。

③ Somebody has been watching our movements.

私たちの動静を見守っていたのだ。

これらの訳出に関して、「①のように、その動作の開始された時期や、継続の期間を明示する語句が含まれている場合、または前後関係からそれがわかる場合は」「完了して

いない意味《「～している」と訳す》であることが多い」とあり、「②③のように、そういう語句のない場合はその動作は、その文が述べられるときまでに完了してしまっている《「～していた」と訳す》のがふつうである」¹⁵⁾と説明されている。しかし、基本的には言及されている行為の完結・未完結について、それを読みとるべき点をはっきり記載するべきであると考えられる。

①では、ほんの短い中断の後また「読む」行為は続くものと考えられる。(休憩をするなどの)中断または、読む行為を終えることになった場合はテイタと言うことが予想される。②③は確かに文脈上完了(完結)していることが理解されるのでテイタが適当であろう。また、継続用法の意味として未完了性を(完了形であるにも関わらず)優先するべきであると考えられる。

一般的に言って、継続用法と読める完了形の表す行為が完結する場合はテイタと訳出されるが、これには2種類の時間構造が読みとれる。1つは完了用法と同じように発話時点(または過去のある基準点)の直前にその行為が終えられた場合である。これは、3.で見たように義務的にタが要求される。2つ目は、この行為が時間的にいくらか遠のいていると知覚される場合である。3.でとり上げた次の(3)の経験用法は実は継続用法の経験用法である。

(3) a. I have once lived in London.

b. 私はかつてロンドンに住んでいたことがある。

「住む」という動詞を状態動詞として認知するなら¹⁶⁾、次の(3 c)は容認されるが、(3 d)は意見が分かれるところである。

(3) c. 私はかつてロンドンに住んだことがある。

d. ?私はかつてロンドンに住んでいる。

完了進行形の次の例に見られる日本語の「木登りをしていた」は、過去時点での継続を表すと読むなら、テイタが適当であると感じられる¹⁷⁾。ここに言及のある子供たちは(ボートから落ちてずぶぬれになり)今、家の中で着替えをしているのであるから、「木登り」はかなり以前に完結している。

(12) a. Is it possible, or could I have just imagined it? Have my children, by any chance, been climbing trees today?・

b. こんなことがありうるかね、それとも私の思い違いかな？ ひょっとしたら、私の子供たちが、今日、木登りをしていたというようなことが？

以上において、完了形は、継続用法では行為が完了（完結）している場合はテイタで訳出すべきであるという点、他の用法では発話時点直前の完了（完結）にタを、それ以外ではテイルによって（直訳することで）時間構造をつかむことができるという点を、他の対応表現も含めて考察した。

ただし、日本語の「テイル」が英語の複数の表現に対応していることを確認しておく必要がある。英作文の時間などにおいて（和文英訳をする場合特に）、つい「テイル」は進行形の訳語であるという思い込みがあり、そのまま「英訳」する学生も多いからである。テイルは、1）動詞の現在形に対応する、2）進行形に対応する、3）完了形に対応する、という点を理解しておくべきである。テイタは、そのまま発話時点を過去に移動することによって、その用法の時間構造を把握できるが、継続用法の完結・未完結のテイル、テイタに注意すべきである。

5. 叙法的「タ形」

最後に、日本語の助動詞タについて、現在または未来の状態に言及する際の用法について本論の日本語の文例をいくつか検討しておきたい。(13)、(14)は「想起のタ型」、(15)、(16)は「発見のタ形」、(17)、(18)は「確認のタ形」と呼ばれるものである¹⁸⁾。

- | | |
|----------------------------|------|
| (13) そうそう、きょうはぼくの誕生日だった。 | [想起] |
| (14) 明日はだめです。明日は研究会がありました。 | [同上] |
| (15) あった、あった……。井戸がありましたよ。 | [発見] |
| (16) 何だそこにいたの。いつ来たんです。 | [同上] |
| (17) きみはたしかおっかさんがいたね。 | [確認] |
| (18) きみは酒はだめだったが、たばこは吸ったね。 | [同上] |

状態性の強い動詞に限って用いられる用法であるが、同じ性質をもつテイルにおい

でも同じ傾向が観察される¹⁹⁾。(18)の文例はその基になっている文が次の(19)のような、特定の時間に限定しない、状態性の強い表現であることを考慮するなら、同類の用法と見なすことができる。

(19) あの人たばこを吸う。

本論において引用した文例(タをもたないもの)にこれらの用法を当てはめて、事態の時間構造を変えない範囲で変更を加えると次のようになる。ただし、経験用法を表すタコトガアルはアルをもつ上記の(14)(15)と同じ用法であるので省略する。「確認」の場合普通は自分以外の物事に関わることを、疑問文の形で聞くので、文末に「ね」、「か」を補って読むものとする。それに応じて英文も付加疑問文など変化するはずであるが、完了形を使えるという点では同じであるので対応する英文もいちいち挙げない。

(2') 彼の4月26日付の手紙は当研究室に届いていました。

(3') 彼はかつてロンドンに住んでいた。

(4') 彼らは去年の9月からロンドンに住んでいた。

(5') 私たちは以前会っていました。

(6') 彼は京都に行っていた。

(7') (あなたは)彼女がほんの子供の時から彼女を知っていた。

(9') 伊藤さんとおっしゃる方が2時からお待ちでした。

これらの用法は基本的なテイルの用法に重層すると考えられるが、このようなタの用法の多様性が、英文の時間構造を把握し英文を理解することより、英語を書くことを難しくしている可能性もあるかも知れない。特に和文英訳という形の英作文には障害になっている場合もあろう。

注

- 1) 場所理論的類型に基づく解説は池上(1981:55-65)に見られる。日本語のテイル、タに完了相(perfective aspect)が観察されるという指摘は工藤(1995:161-163)、

- 井上（2001：154-155）などにある。
- 2）本稿は、言語文化学会第16回大会（2002年12月15日、名古屋経営短期大学）における口頭発表「英語（文法）参考書における完了形の日本語対応表現について」の内容に加筆したものである。
 - 3）綿貫ほか（2000：374-375）より。
 - 4）安藤（1969：120）より。Bernard Comrie は "... the term 'perfect' refers to a past situation which has present relevance, ..."と説明している（Comrie 1976：12）。
 - 5）むしろ、日本以外の英語学者が「完了用法」を例外的用法として追加的に説明しているのは興味深い。英語における完了形を一般言語学的観点から記述した Comrie（1976：56-61）は、次の4用法に区別している。結果用法（perfect of result）、経験用法（experiential perfect）、継続用法（perfect of persistent situation）、そして近接過去用法（perfect of recent past）。詳しくは下内（1994）を参照。
 - 6）阪倉（1974：263-264）。
 - 7）「ある時間内続いて行われる種類の動作、作用を表わす。～テイルの形になり、動作の進行中であることを表わす。」（町田、1989：24）
 - 8）リーチ（1976：53）。訳文も同書より。一般に日本語では状態動詞表現にさらにテイルをつけることはない。「ある」「いる」もそのまま継続用法として用いられる。
 - 9）この日本語の事情を考慮するなら「経験・記録用法」が名称として相応しい。井上（2001：107）など。
 - 10）（6）a、c、dは、杉山（1998：243）より。
 - 11）英語の現在完了形は状態性の強い動詞とともに形成される場合、普通にはその動詞の示す行為・状態は、終結を暗示する文脈がない限り完結しない。このような用法をリーチ（1976：53）は present involvement と説明している。また、現在完了進行形も、その内部に状態性をもつ進行形という表現形態を完了形に取り込むという手続きにより、状態動詞による完了形とほぼ同じ構造をもつと言えよう。この構造における未完了性をリーチ（1976：76）は潜在的未完了性（Potential Incompleteness）と呼んでいる。
 - 12）完結相は perfective aspect の訳であるが、英語の完了形のもつ「完了」との関係が紛らわしいので、完結相、終結相、完成体、などの用語を用いているようである。この perfective aspect は状況・行為を包括的に捕らえ、その状況の特定の局面に関心を示さないアスペクト（相）である。Comrie（1976：12）は次のように

説明している。

The term 'perfective' contrasts with 'imperfective,' and denotes a situation viewed in its entirety, without regard to internal temporal constituency....

行為の未完結は行為の部分を表し、完結は全体を表すわけであるから、それぞれ「部分相」「全体相」と呼ぶのも明解である（町田、2001：21）。英語の「進行相」も前者の1種類ということになる。ただし、（8 b）に見られるテイタが「完結相」を表す専用の形式というわけではない。経験用法に対応するテイルは、日本語のアスペクトでは「回想」に近い用法で、「過去における完結相」（町田、1989：160）と言える。

- 13) （9）（11）ともに、綿貫ほか（2000：427）より。
- 14) 杉山（1998：257）。進行形の訳語にテイルをあて、完了形の訳語にもテイルを与えるのであるから、そのままの合形成を作ると、「テイル+テイル」は「*テイテイル」という形式になる。「テキテイル」は全ての場合にあてはまらないので、「し（続け）ている」の方が分かりやすい。「進行」のテイル、「完了」のテイルの他に、「継続」のテイルをその時間構造の違いから訳語として考えてもいい。
- 15) 杉山（1998：257）より。
- 16) Diver（1963：143）が、現在時との間隙があっても住む行為を表す現在完了は使えらるゝとして挙げた例、*I have lived in Chelsea, but since 1914 I have lived in London.* は、日本語で言うには「私は（以前）チェルシーに住んでいたが、1914年以來ロンドンに住んでいる」の方が自然に聞こえる。さらに、*I lived in Chelsea until 1914, but since then I have lived in London.* 「私は1914年までチェルシーに住んでいたが、それ以降ロンドンに住んでいる。」という例も挙げられている（Diver 1963：143）。
- 17) レーマン（1996：90-91）。（12 b）の訳文も同書より。
- 18) 国広（1967：66-67）。
- 19) 下内（1995）参照。

参考文献

- 安藤貞雄（1969）「完了形について—若干の問題点」安藤貞雄『英語語法研究』東京：研究社
- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試—』

- 東京：大修館書店
- 井上 優（2001）「現代日本語の「タ」—主文末の「…タ」の意味について—」つくば
言語文化フォーラム編『「た」の言語学』東京：ひつじ書房
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』
東京：ひつじ書房
- 国弘哲弥（1967）「日英両語テンスについての一考察」国弘哲弥『構造的意味論—日
英両語対照研究—』東京：三省堂
- 坂倉篤義（1974）『改稿 日本文法の話』東京：教育出版
- 下内 充（1994）「日英語の完了表現について」中井悟ほか編『ことばの樹海—石黒昭
博先生還暦記念論文集』東京：英宝社
- （1995）「日英両語における完了相のもつ未完了性」『京都産業大学国際言語
科学研究所所報』第16巻
- 杉山忠一（1998）『英文法詳解』東京：学習研究社
- 町田 健（1989）『日本語の時制とアスペクト』東京：アルク
- （2001）「外国語との対照から時制をとらえる」月刊『言語』2001年12月号、
東京：大修館書店
- リーチ、G. N.（1976）〔國弘哲弥訳注〕『意味と英語動詞』東京：大修館書店〔Leech, G.N.
Meaning and the English Verb. London: Longman, 1971.]
- レーマン、アーネスト（1996）〔曾根田憲三ほか訳〕『サウンド・オブ・ミュージック』
名古屋：スクリーンプレイ出版
- 綿貫 陽ほか（2000）『ロイヤル英文法』（改訂新版）東京：旺文社
- Comrie, Bernard（1976）. *Aspect—An Introduction to the Study of Verbal Aspect
and Related Problems*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Diver, William（1963）. "The Chronological System of the English Verb." *Word*
19.